

申請者:藤野 雅史

論文題目 政府における管理会計の歴史的展開

審査員 小松 章  
山内弘隆  
尾畑 裕

本論文は、政府部門(地方政府も含む)において管理会計がどのように導入され発展してきたかを、管理会計の発祥の国アメリカについて考察したものである。管理会計は、もともと企業の経営管理のために生成したものであるが、筆者の意図は、たんに民間で使われる管理会計が政府部門に適用された事例を跡づけるというのではなく、政府管理会計ともいべき政府固有の管理会計を年頭に置き、それがいかに形成・確立し展開してきたかを、学説史的に跡づけることを目的としている。

筆者によれば、政府管理会計は、行政改革を機に生成を見た1900年代から20年代の政府会計を前史とし、やがて政府会計のなかに経営管理プロセスへの関心が高まることによって生成した。1960年代後半に連邦政府に導入されたPPBSにより、政府管理会計は、政府会計の中に財務会計に並ぶものとして確立することになる。しかし、政府における管理会計へのニーズは、政権交代による政策変更に伴って影響を受ける性格を有しているため、政府管理会計は必ずしもつねに「前進」の道を歩んできたわけではない。PPBSも短命に終わった。筆者は、いったん導入された管理会計手法が、後景に追いやられてしまう事実を直視し、その理由や後の手法との内在的つながりを解明する。1970年代以降、業績測定システムの導入が図られ、政府管理会計は再構築され、さらに90年代になり本格的に新展開するに至ったと、筆者は位置づけている。

筆者が取り組んだテーマは、政府部門における管理会計というこれまで必ずしも十分に注目を引くことのなかった領域のものであり、しかも歴史を遡って体系的に研究を深めた点で、本論文の独創性は高く、また学術的貢献も大きいと考えられる。本論文の研究は、直接にはアメリカを対象としたものであるが、行政改革を進めつつある日本の政府部門に対する実践的示唆もけつて小さくはない。

内容に関する若干の問題点として、会計領域を企業会計と政府会計に二分し、さらに後者を財務会計と管理会計に二分する立場に立つからには、政府管理会計のあるべき形を理論的に、より明確にすることが望まれ、また政府における管理会計手法の導入や変更の背景説明にも、より整合的な視点が望まれることを指摘することができる。

とはいえ、基本的に本論文の学術的価値は、きわめて大きいと評価される。よって、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第4条第1項の規定により一橋大学博士(商学)の学位を受けるに値するものと判断する。